

全教神協広報

第一一四号

全国教育関係神職協議会

〒一五〇〇五三

東京都渋谷区代々木一丁目

神社本庁内

電話 〇三三三七九八〇一二

Fax 〇三三三七九八一九九

題字 諏訪秀一氏

「大人の存在する社会を」

全国教育関係神職協議会 副会長 廣江 直澄



りました。

私自身は「幼稚化した日本社会」とは、別な言い方をすれば「大人の存在を感じない社会」だと思います。社家に生まれた私は、家庭の三要素と言われる「学び」「遊び」「労働」を体験しました。

ある評論家は「今の日本社会は幼稚化している。」「政治・経済・教育等の社会のあらゆる分野で顕著になっている。」と評していました。戦後の平和な社会で経済成長を続けてきた結果、国民は豊かさを享受してきましたが、その反面、失われたものがあるという話はいま前から語られてきたテーマでもあ

「遊び」「労働」を体験しました。恐らく当時の子どもたちは、程度の違いはありますが、同様の経験はしていたと思います。代官家と言う特殊な家庭環境は、身近に大人の存在があり、大人には敬意を払うことが求められていたと思います。

「学び」は氏子さんとの平素の

関わりで、来訪者には座って対応する。外であつたら挨拶をする。そこでは、いつもありがとうございます、お世話になります等の言葉を添えるようにと教えられました。お蔭で氏子さんからは、幼少期は坊さん、学生時代までは若さん、社会人になってからは旦那さん、年齢を重ねると称宜さん、先生と出世魚のように呼名が変化しました。まさに氏子さんという大人に育てられた面があつたと思います。「遊び」は家庭内では兄弟で、屋外では友人たちと、遊具や玩具が今ほど充実していないので、ある物で遊ぶ工夫を覚え、更には子ども社会での人間関係を学びました。大人の真似をして背伸びをするも、どうしても超えられない大人の壁と言うものも感じました。「労働」は家業を持つと、その子どもは殆どが大人を手伝っています。私自身はお祭りの時は勿論ですが、夏越祭の人形さん配り、

年末の釜祓い、年始回りと手伝いをするのは当然のことでした。このように身近に大人の存在を感じて育つた幼少年期でしたが、昭和から平成、令和と時代が移り、家庭の役割が学校教育の役割に追加され、今度は学校教育で担っていたものが社会へ移行されて行くように感じます。幼稚化した日本社会で果たして、家庭、学校が担うべきものを社会が成熟させられるのだろうかかと心配してしまいます。大人の定義は多岐にわたりますが、「責任を持つ」、「物事を達成する」この二点を挙げたいと思います。そして、自分たちの時はこうだった、という経験値だけに頼るのでは無く、時代に合った伝え方は何かを学習する能力を身につけ、アップデートする事が大切だと思います。やがて教育現場を離れますが、若い人に日本の素晴らしさを伝えられる「真の大人」へと精進努力をしたいと思えます。